

いにしえの讃岐



▲ワークショップ「見て触ったハニワを描こう！」(令和7年5月3日に開催)では、プラバンにハニワの絵を書いて、前方後円墳に飾りつけをしました



▲令和7年7月19日に実施した、是弘遺跡(さぬき市)現地説明会

埋蔵文化財センターボランティア SNS始めました！

センターのイベントやボランティア活動の様子を発信していきます。是非、フォローをして香川の歴史に親しんで下さいね！

Instagram

SANUKIMAIJORA

X (旧 Twitter)

アカウントを讃岐まいぼら

香川の出土遺物から～古代瓦～

日本列島における屋根瓦の生産技術は、6世紀末の奈良県飛鳥寺の造営に伴い、他の寺院造営技術とともに朝鮮半島の百済から伝えられました。当初、寺院造営やそれに付随する瓦の生産は畿内に限られていましたが、仏教の奨励に伴い7世紀後半以降、日本列島各地にひろがります。

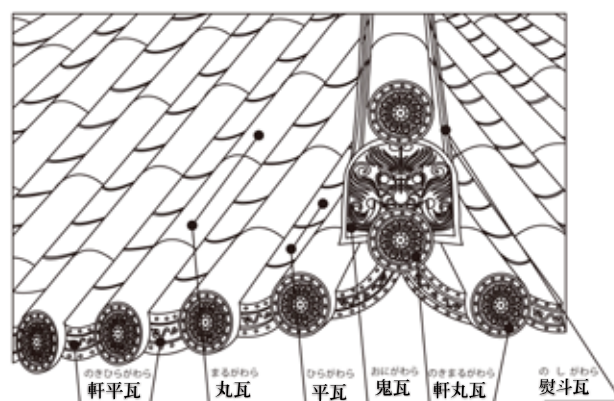
讃岐国でも、遅くとも7世紀第4四半期には寺院造営が始まり、飛鳥～奈良時代にかけて約30カ所の寺院が建立されます。畿内及びその周辺地域を除けば、一国に建立される寺院数としては突出した数です。また、8世紀中頃には、聖武天皇による国分寺建立の詔に応じて讃岐国分寺・国分尼寺が創建され、塔・金堂・講堂・僧房などを備えた瓦葺の伽藍が整えられました。

こうした寺院の瓦を生産した窯としては、飛鳥時代の三豊市宗吉瓦窯跡、高松市と坂出市の間に位置する奈良時代の府中・山内瓦窯跡、平安時代後期の如意輪寺窯跡、綾川町丸山窯跡や、ますえ畑窯跡などがあります。これらの瓦窯のうち、国分寺瓦窯である府中・山内瓦窯跡を除く窯では、讃岐国内の寺院の瓦だけではなく、都へ供給する瓦も生産されました。このように、古代の讃岐は瓦の一大生産地だったのです。

(池見 治代)

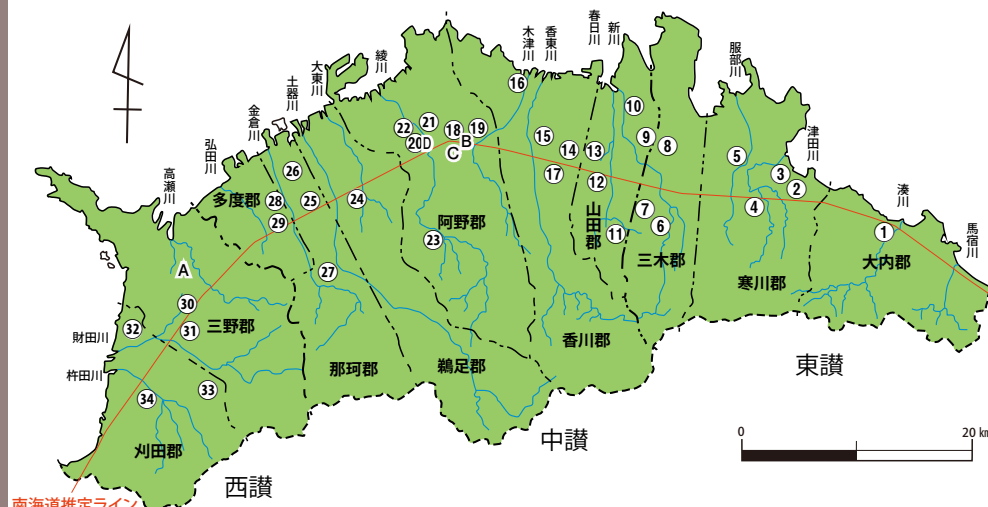


▲ 図1：開法寺跡の軒丸瓦(左)・軒平瓦(右)



▲ 図2：古代瓦の名称

出典：神奈川県歴史博物館編2008『瓦が語る一かながわの古代寺院一』
古代の屋根瓦は丸瓦と平瓦を交互に並べる「本瓦葺き」という葺き方をします。丸瓦・平瓦のほかに、軒先を保護する軒丸瓦・軒平瓦、棟先に設置する鬼瓦など、屋根の部位ごとに様々な瓦を使い分けます。



▲ 図3：古代寺院・窯跡の分布

出典：高松市歴史資料館編1996『讃岐の古瓦展』所収の図をもとに作成

- 1 白鳥廃寺
- 2 下り松廃寺
- 3 石井廃寺
- 4 極楽寺跡
- 5 願興寺
- 6 上高岡廃寺
- 7 長楽寺
- 8 始覚寺
- 9 宝寿寺
- 10 山下廃寺
- 11 下司廃寺
- 12 高野廃寺
- 13 拝師廃寺
- 14 多肥廃寺
- 15 坂田廃寺
- 16 勝賀廃寺
- 17 百相廃寺
- 18 讃岐国分寺
- 19 讃岐国分尼寺
- 20 開法寺
- 21 鴨廃寺
- 22 醍醐寺
- 23 観音台廃寺
- 24 法勤寺
- 25 宝幢寺
- 26 田村廃寺
- 27 弘安寺跡
- 28 仲村廃寺
- 29 善通寺
- 30 道音寺
- 31 妙音寺
- 32 高屋廃寺
- 33 大興寺跡
- 34 紀伊廃寺
- A 宗吉瓦窯跡
- B 府中・山内瓦窯跡
- C 陶・十瓶山瓦窯群(丸山窯跡・ますえ畑窯跡など)
- D 讃岐国府跡



香川県埋蔵文化財センター

開館時間 9:00～17:00
休館日 土日・祝日、12/29～1/3
(イベント開催日は開館)
所在地 〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4
TEL 0877-48-2191



宮脇町一丁目遺跡の調査成果

香川県埋蔵文化財センターでは宮脇町一丁目遺跡（高松市）の発掘調査を令和7年4月～7月に実施しました。調査地は、高松城下町の絵図を見ると、天保13年～弘化3年(1842～46年)には、五百羅漢を祀る寺として信仰を集めた「祥福寺」の境内に位置していたと考えられます。



▲図1：遺跡の位置 国土地理院地図 GSI Maps web に加筆

【土の堆積状況から調査地の形成過程を考える】

写真1は宮脇町一丁目遺跡で確認した土層の堆積状況で、下のものほど古い時代のもになります。

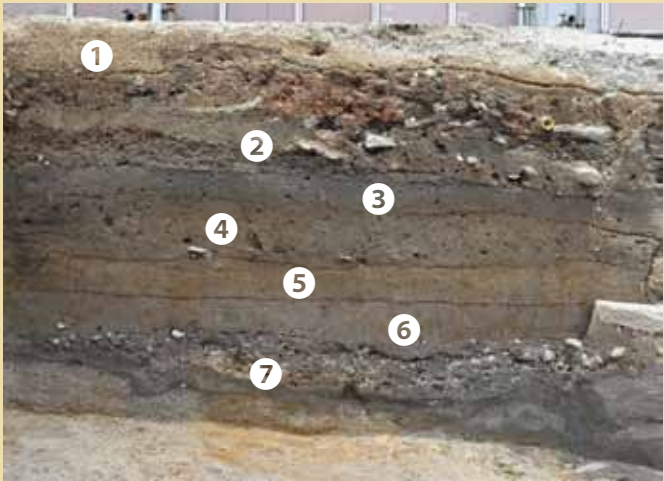
土層は大きく7層に分けられました。最も古い第⑦層の土はきめ細かく、円礫（流水で表面が磨かれ、丸くなった礫）を多く含むため、河川の痕跡と考えられます。

第⑥層は湧水が激しい不安定な土層で、河川の流れが変わり、低湿地状の土地に変化したと考えられます。一方、第⑤層は締まった粘質土で、非常に安定しており、人々が生活するのに適した土地になったことが分かります。また、⑥層から鎌倉時代、⑤層から江戸時代の遺構が見つかりました。

その後、土地を整地したと考えられる第④層があり、出土した土器から江戸時代後期に整地が行われたと考えられます。その後、戦前には水田として利用され（第③層）、太平洋戦争末期の高松空襲による被災を受けた（第②層）後に土地を造成（第①層）して現代の景観ができたと推測されます。

このように、調査地は河川が昔に流れており、鎌倉時代以降に河川の流れが変化し、人々の暮らしの場へと変わっていく過程が読み取れました。

また、発掘調査成果に加えて現在の地割や絵図をみると、江戸時代に姥ヶ池から流れる播磨谷川に向かって、霊源寺の前から伸びる水路が整備されたことが分かり、調査地の周辺でも水の流れを変えようとしていたことが分かります（写真2）。



▲写真1：調査区北壁(土の堆積状況)

- 1 造成土【現代】
- 2 高松空襲の戦災層
- 3 旧耕作土(水田) 【戦前】
- 4 整地土(遺物包含層) 【江戸時代】
- 5 自然堆積土【江戸時代】 遺構を確認
- 6 自然堆積土【鎌倉時代】 遺構を確認
- 7 河川堆積土(弥生土器片が出土)



▲写真2：讃岐高松城下絵図【高松市歴史資料館提供のものを改変】



▲ 図1：遺構の平面図

【鎌倉時代の調査成果】



▲ 写真3：溝1の堆積状況



今回の調査では溝などを確認しました。なかでも、溝1からは土師質土器杯・小皿に加えて十瓶山窯跡群(坂出市・綾川町)で生産された西村型須恵器碗や現在の大阪府南西部で生産された和泉型瓦器碗中国の龍泉窯(浙江省)で生産されたと考えられる青磁碗も出土しており、香川県でつくられたものだけでなく、県外・国外でつくられたものが調査地付近へ運ばれてきていたことが分かりました。

これらの土器・陶磁器の種類や形の特徴から、溝1は鎌倉時代(13世紀代)に埋められたものと判断しました。

◀写真4：溝1から出土した遺物

【江戸時代の調査成果】



▲写真5：土坑1の遺物出土状況



- 1 軒平瓦 2 碗（肥前系） 3 播鉢（堺・明石系） 4 播鉢（備前系） 5 播鉢（堺・明石系）
- 6 燈明皿（備前系） 7 仏飯器（肥前系） 8 人形徳利（備前系） 9 足釜

▲写真6：土坑1から出土した遺物

【まとめ】

まず鎌倉時代の調査成果から、様々な地域から土器が運び込まれたことが分かりました。当時の調査地の周辺には港（「野原」：現在の高松城周辺）とそれに付随する集落（「野原庄」）が存在していたことや、調査地は港を管理していたと考えられる石清尾八幡宮の門前にも近いことから、中世の野原の実態を考えるうえで重要な調査成果となりました。

また、江戸時代の調査成果は調査地で大規模な改変があった可能性を示すとともに、大量の瓦片が出土したため、近隣に瓦葺きの建物があったと考えられます。これらの資料は祥福寺との関連を示すものとして注目されます。（稲垣 僚）